



HOKKAIDO UNIVERSITY

Title	アスペクチュアリティと動詞分類
Author(s)	福沢, 将樹
Citation	国語国文研究, 114, 54(1)-39(16)
Issue Date	2000-01-10
Doc URL	https://hdl.handle.net/2115/94685
Type	journal article
File Information	kokugokokubunkenkyu_114_54-39.pdf



アスペクチュアリティと動詞分類

福 沢 将 樹

0. はじめに

アスペクチュアリティによって「動詞」进行分类する試みは、工藤真由美氏によって包括的な研究の成果が上げられている。

しかし、次のような例は工藤氏の枠組みでは全く捉えることができない。

ドアを開けたが、開かなかった¹。

「開ける」は工藤の用語では「主体動作客体変化動詞」に相当するので、「開けた」という表現は、実際に開くに至ったか、少なくとも開きはじめて段階までは達している筈である。しかし上の例では、実際には開かなかったのだから、「開けた」と言っても、その実情は“開けようと試みた”という程度である。

このような場合において、なぜ「開けた」という表現が許されるのか、また、その場合、通常の“開くに至った”“開きはじめて”の場合とどういう関係にあるのかが問われなければならない。

類例に、次のようなものも挙げられる。

これは、勝ったな。(将棋等で、まだ相手は負けを認めていないが、自分が大優勢であるという場合)

本稿では、これらの一見レアケースに見える例も、アスペクチュアリティのパターンの一つとして何ら特殊なものではないことを明らかにする。

1. 動詞分類の問題点

工藤 (1982 a・b・1983・1987・1995) は現代共通語と宇和島方言についてアスペクチュアリティを考察したものである。そこでは共通語のテイル形 (している・して

¹ 宮島 (1985)。なお桜井 (1978) は、平安時代語において同種の現象を指摘したが、現代語にはないとしている。しかし、池上 (1981)・宮島 (1985) のように、「～したが、～しなかった」の構文にすると、現代語でも比較的容易に表れる。

いた)・非テイル形(する・した)と宇和島方言のヨル形(しよる・しよった)・トル形(しとる・しとった)・非ヨル・非トル形(する・した)のアスペクチュアリティーを記述する際に、動詞による相違に注目しており、若干の語彙リストをも掲げている。

工藤の動詞分類の体系は以下の通りである。本稿では主に工藤(1995)をもとにする。

動詞全体を「(A)外的運動動詞」「(B)内的情態動詞」「(C)静態動詞」の三つに分けるが、そのうち「(A)外的運動動詞」に非テイル形(する・した)とテイル形(している・していた)とのアスペクト対立が顕著に表れるとしている。

工藤のアスペクチュアリティーの枠組は以下のようになっている。

	スル(シタ)	シテイル(シテイタ)
(A・1) 主体動作・客体変化動詞	ひとまとまり性 ＝終了限界達成性	動作継続性 (変化結果継続性)
(A・2) 主体変化動詞	終了限界達成性	変化結果継続性
(A・3) 主体動作動詞	ひとまとまり性 開始限界達成性	動作継続性

(工藤(1995)、88頁)

「ひとまとまり性」と「限界達成性」については、次のような説明がある。

(1)〈ひとまとまり性〉 運動(動作、変化)の成立＝開始限界から終了限界までを全一的にとらえる

(2)〈限界達成性〉 開始の時間的限界か終了の時間的限界のどちらかのみをとらえる

(2.1)〈終了限界達成性〉 変化の終了(結果の成立)限界をとらえる

(2.2)〈開始限界達成性〉 動作の成立＝開始限界をとらえる

(工藤(1995)、80頁)

具体例は省略するが、各形式はおおむね上の表のような意味の分かれ方をするという。しかし、この意味の分かれ方は絶対的なものではなく、条件により変容することが指摘されている。

例えば、(A・1) 主体動作・客体変化動詞のテイル形は通常「動作継続」の意味になるが、主体に意思のない場合や、主体と客体の間に再帰的な関係があって、客体の変化が主体の変化にもなりうる場合には、テイル形が「結果継続」の意味になることがあるという。

隣の人が、コスモスを植えていた。〈動作継続〉

隣の家は、コスモスを植えていた。〈結果継続〉 (工藤(1995)、82頁)

花子さんが、窓を開けている。〈動作の継続〉

花子さんが、口を開けている。〈結果の継続〉（工藤（1995）、82 頁）

次に、(A・2) 主体変化動詞の非テイル形は「ひとまとまり性」を表すが、同じ「ひとまとまり性」でも、「変化過程」つまり変化の開始から終了までを「ひとまとまり」として捉えたものと、「結果状態」つまり変化の終了後の状況を「ひとまとまり」として捉えたものとの、二つの類型があることが指摘されている。

わたし死ぬわ。〈変化過程のひとまとまり性〉

しばらく手伝いに行きます。〈結果状態のひとまとまり性〉

（工藤（1995）、84～85 頁）

またテイル形は通常「変化の結果の継続」を表すが、適当な修飾語があると（A・2）主体変化動詞でも「動作の継続」を表すことがあるという²。

血は舗道の熱気でどンドン乾いていた。

気がつくとよろよろ彼女が立ち上がっている。

山の上で雨にぬれていたのですか。

十人ばかりの子供が大川の土手をガヤガヤ学校から帰っていた。

（4 例、工藤（1982 a）、67～68 頁）

同様のことは（A・3）主体動作動詞にも指摘されている。

内股まで流れていたわ。〈変化の結果の継続〉（工藤（1982 a）、64 頁）

このように、工藤の主張には例外が少なくない。従って事実は次のようになる。

	スル（シタ）	シテイル（シテイタ）
(A・1) 主体動作・客体変化動詞	ひとまとまり性 ＝終了限界達成性 (開始限界達成性)	動作継続性 (変化結果継続性)
(A・2) 主体変化動詞	終了限界達成性 (開始限界達成性)	変化結果継続性 (動作継続性)
(A・3) 主体動作動詞	ひとまとまり性 開始限界達成性	動作継続性 (変化結果継続性)

統計的に、或いは、典型的には、工藤の主張が大体成り立つことは認められる。し

² この指摘は工藤（1995）では省略されている。

かし、事実としてどこまでありうるか、どこからがありえないか、という観点から見ると、(A)の1～3全てに亘って、非テイル形(する・した)には「開始限界達成性」と「終了限界達成性」の両方があり³、テイル形(している・していた)には「動作継続性」と「変化結果継続性」の両方があることがわかる。

ここで工藤の主張の問題点として2点指摘できる。1点目は、「動詞の多義性の問題」と呼ぶ。

動詞の多義性の問題：同じ動詞で複数の動詞分類枠に跨ってしまうため、動詞を分類することができない。

動詞の性格が条件によって変容するのであれば、「動詞」のリストを挙げる必要はあるのか——更に言えば、リストを掲げることはそもそも可能なのか、という問題である。もし「動詞」のリストを掲げるなら、積極的に一つの動詞を複数の枠に認定すべきではないか、という疑問が湧く。つまり、例えば、同じ「開ける」という語形でも、アスペクチュアリティーの観点から考えると、同音異義の様々な「開ける」に分けられるのではないかということである。

2点目は、「アスペクチュアリティーの多義性の問題」と呼ぶ。

アスペクチュアリティーの多義性の問題：同じ語形で複数のアスペクチュアリティーを実現してしまう。

これはどういうことかと言うと、次のような問題である。(A・1) 主体動作・客体変化動詞のテイル形(している・していた)には「動作継続性」と「変化結果継続性」とがある。(A・3) 主体動作動詞の非テイル形(する・した)には「ひとまとまり性」と「開始限界達成性」とがある。なぜこのように、同じ語形で2種類の意味類型に分かれてしまうのか、という点である。これらは、おのおの統一できるのではないか、統一できないとしたら、それは動詞の類型の問題なのか、それとも別の問題なのか、という疑問が続く。

2. アスペクチュアリティーに関する単語独立性

前節で指摘した問題を解くには、次のように考えるとよい。全てを単独の動詞と考えてはどうだろうか。

以下に工藤の例を取り上げて説明する。

³ (A・3) 主体動作動詞では「ひとまとまり性」となっているが、何らかの動作を「ひとまとまり」として考えた場合に、必然的に終了限界が生じてくるので、「終了限界達成性」でもありと考えると構わない。ここで言う「終了限界が生じる」とは、具体的な文脈に沿った場合のことであり、当該動詞の語彙の意味(仮にそういうものが設定できるとして)に内在するものとしてあるということではない。

(A・3) 主体動作動詞

東京へ行って古本屋歩いた。〈動作のひとまとまり性〉→出来事を表す動詞＋た
新橋で友だちと別れて、日本橋までは馬車に乗って、それから歩いた。荒布橋を
渡ろうとするころ、彼は元船町を斜めにみて通った。〈開始限界達成性〉→動
作の開始を表す動詞＋た

(A・3) 主体動作動詞の非テイル形は、「ひとまとまり性」か「開始限界達成性」を表
すという。「ひとまとまり性」を表す非テイル形は、動詞部分が何らかの「出来事」を表
す。それに対して、「開始限界達成性」を表すものは、動詞部分が動作の「開始」を表す
としよう。

そうすると、下の例のようなテイル形の場合、「変化結果の継続性」は、動詞部分「死
ん」が「出来事を表す動詞」で、「ている」部分がその後の状況の継続を表す。一方、「動
作の継続性」も同様に考えると、動詞部分「歩い」が「動作の開始を表す動詞」で、「て
いる」部分がその後の状況の継続を表すというように類比的に捉えることができる。

(A・2) 主体変化動詞

後悔したってその時はどうせ死んでいるわ。〈変化結果の継続性〉→出来事を表す
動詞＋ている

(A・3) 主体動作動詞

森の中の径を歩いていて。〈動作の継続性〉→動作の開始を表す動詞＋ていた

以下同様に考えると、(A)外的運動動詞には、「出来事を表す動詞」と「動作の開始を
表す動詞」の2種類があることになり、パターンが単純化できる⁴。

	非テイル形	テイル形
出来事動詞	ひとまとまり性＝終了限界達成性	変化結果継続性
動作の開始動詞	開始限界達成性	動作継続性

工藤 (1995) との対応を示すと、以下のようになる。

工藤分類	スル (シタ)	シテイル (シテイタ)	福沢分類 (暫定)
(A・1) 主体動作・客体 変化動詞	ひとまとまり性 ＝終了限界達成性	(変化結果継続性)	「出来事動詞」
	(開始限界達成性)	動作継続性	「動作の開始動詞」
(A・2) 主体変化動詞	終了限界達成性	変化結果継続性	「出来事動詞」
	(開始限界達成性)	(動作継続性)	「動作の開始動詞」
(A・3) 主体動作動詞	ひとまとまり性	変化結果継続性	「出来事動詞」
	開始限界達成性	(動作継続性)	「動作の開始動詞」

⁴ ここでは開始と終了しか考慮に入れていないが、開始前や終了後の局面についても含めた
総合的な考察については後述する。

「出来事を表す動詞」とは、出来事自体を表し、その出来事の後に結果または何らかの効果が継続するものであり、「動作の開始を表す動詞」とは、文字通りある程度の過程を持つ動作の開始を表し、その開始の後に動作の進行が継続するものである。ここで「出来事」や「動作の開始」を、抽象的に“変化”と呼んで統一することにすれば、次のように整理できる。

出来事を表す動詞：変化の後に結果や何らかの効果が継続するもの

動作の開始を表す動詞：変化の後に動作の進行の継続するもの

また工藤（1995）は動詞の「完成相」（非テイル形）の「する」が動作や状態の進行や持続を表すことは、「(A)外的運動動詞」には基本的に認めていないが、実際は文章にはしばしば見られるものである⁵。従って、動詞が「変化」のみを表すというのは不足であり、「変化」の後に継続する状況をも表す。

つまり動詞とは、アスペクチュアリティーの観点から見ると、次のように単純化して考えることができる。

動詞とは、基本的に単一の変化を表すものである。但し、変化自体を表したり、変化の後の状況を表したりする。

ただその「変化」の内実が、“動作の開始”であったり“動作の終了”であったり“ひとまとまりの出来事”であったりというニュアンスの違いがあるということである。このように考えると、1節で指摘した問題点が解決できる。

動詞の多義性の問題：同じ動詞で複数の動詞分類枠に跨ってしまうため、動詞を分類することができない。

アスペクチュアリティーの多義性の問題：同じ語形で複数のアスペクチュアリティーを実現してしまう。

本稿は“一つの動詞”という概念を見直し、アスペクチュアリティーによってそれぞれ独立した動詞と見做すため、「主体動作動詞」「主体変化動詞」のような分類の仕方は殆ど放棄してしまうことになる。分類を放棄するのだから、分類枠に収まらないものが出てくるという問題は起こりようがない。その結果、「動詞の多義性の問題」は解決される⁶。

また同様に、同じ語形でも別の動詞と見做すのだから、別のアスペクチュアリティー

⁵ 例えば土岐（1999）は現代語においても「する」の形が現在の進行や持続を表すことを論証したものである。

⁶ 「動詞の多義性の問題」については森山（1983・1986・1988）のように、動詞自体の分類ではなく動詞句のレベルで分類すれば、ある程度解決できる。しかし動詞句のレベルでも多義性が見られるので、本稿のように更に徹底しなければならない。

を表してしまうのは至極当然のことである。同じ動詞が複数のアスペクチュアリティーを表すのではなく、別々の動詞が別々のアスペクチュアリティーを表すのである。よって、「アスペクチュアリティーの多義性の問題」も解決される。

以上述べてきたように、一つの動詞が様々な意味を持つと考えるより、意味の異なる同形の動詞がそれぞれ存在すると考える方が問題を単純化できることがわかった。このことを「アスペクチュアリティーの単語独立性」と呼ぶことにする。

アスペクチュアリティーの単語独立性：同じ形態の用言がアスペクチュアリティーによってそれぞれ別の用言として見られること。

以上のように用言を分類すると、日本語の記述は可能である。しかし、これだけではある意味で解りにくさがある。なぜなら、多くの用言（特に動詞）は、同じ形態でアスペクチュアリティーの異なる複数の相方を持っているのに、それぞれ別の動詞とただけでは、その現象を捉えられないからである。例えば「上がった」という時、それはすっかり上がり切ったことをいうアガリという動詞であることもあれば、今まで上がらなかったのがようやく上がり出したことをいうアガリという動詞であることもある。また、目下ぐんぐん上がり続けていることを「上がる」ということもある。これらが、それぞれ別の動詞であるというのは、本稿の見方では正しいが、逆に同語形の各動詞がどういう相互関係にあるかがわからない。

そこでこれからは、一般にどんな相方のパターンがあるかを述べていくことにする。

3. 同語形の組み合わせの諸類型

動作や変化の分類には、伝統的に「開始」「終了」という「局面」に分割する見方が採られてきた。これは直感的に解りやすい利点があるので、本稿でも「開始」「終了」という局面を軸に枠組を作る。以下にその内容を記す。

開始前

変化直後を表す「した」

持続を表す「している」

持続を表す「する」

変化直前を表す「する」

開始後終了前

変化直後を表す「した」

進行・持続を表す「している」

進行・持続を表す「する」

変化直前を表す「する」

終了後回復前

変化直後を表す「した」

持続・状態を表す「している」

持続・状態を表す「する」

大きく「開始前」「開始後終了前」「終了後回復前」の3つの局面に分ける。その3つの局面の中の下位類型を述べるに、3つのうちで一番内容の豊富な「開始後終了前」の局面をまず例にしよう。これを形式と意味に即した形で分類すると、「変化直後を表す「した」」、「進行・持続を表す「している」」、「進行・持続を表す「する」」、「変化直前を表す「する」」の4つの類型に分けられる。「終了後回復前」の局面の場合は、「開始後終了前」と違って4つ全部揃わない。

次に具体例を示して説明する⁷。

局面	型 式	例 文
開始前	変化直後を表す「した」	
	持続を表す「している」	
	持続を表す「する」	
	変化直前を表す「する」	列車がスピードを上げるよ。
開始後 終了前	変化直後を表す「した」	列車がスピードを上げた。
	進行・持続を表す「している」	列車がぐんぐんスピードを上げている。
	進行・持続を表す「する」	列車がぐんぐんスピードを上げる。
	変化直前を表す「する」	もう少しで列車がスピードを十分に上げるよ。
終了後 回復前	変化直後を表す「した」	列車がスピードを上げた。
	持続・状態を表す「している」	列車は140キロまでスピードを上げている。
	持続・状態を表す「する」	列車が140キロまでスピードを上げる。

まず「開始前」の「変化直後を表す「した」」「持続を表す「している」」「持続を表す「する」」は難しい問題があるので、説明を後回しにする。次の「変化直前を表す「する」」とは、「今はまだスピードを上げていないが、もうすぐ上げる」という意味で、「スピードを上げる」という命題が、「近接未来」の意味に見えるものである⁸。

次の「開始後終了前」の局面で、「変化直後を表す「した」」とは、「スピードを上げる」という命題が、「近接過去」の意味に見えるものである。「スピードを上げる」という事象には、「上げ始め」と「上げ終わり」との間に時間幅がありうるので、その最初期の段階を「列車はスピードを上げた。」のように表現することができる。また、その間の過程を「列車はぐんぐんスピードを上げている。」「列車はぐんぐんスピードを上げる。」のように表現することができる。「進行・持続を表す「している」」「進行・持続を表す「する」」とは、この過程の段階を述べたものである。テイル形(している)も非テイル形(する)もほぼ同じ状況を表しうるが、非テイル形の方は文体に特徴が

⁷ 本節の例文には『日本語基本動詞用法辞典』（小泉保・船城道雄・本田晶治・仁田義雄・塚本秀樹編、大修館書店、1989年）を利用した。

⁸ このような表現が「未来」ではないことは別稿に譲る。

あり、独語的、詩的、日記の記述的な雰囲気を持つ。

次の「変化直前を表す「する」」とは、「上げ終わり」の意味を表す「十分に上げる」という命題が、「近接未来」の意味に見えるものである。「開始前」の「変化直前を表す「する」」の表現と平行した関係に捉えられる。

以上のような「開始後終了前」の局面において見られる関係は、「終了後回復前」においてもほぼ平行した関係として捉えることが期待される。

「終了後回復前」の局面で、「変化直後を表す「した」」とは、「スピードを上げる」という命題が、これも「近接過去」の意味に見えるものである。同じ表現が「開始後終了前」の局面でも用いられているが、「終了後回復前」の方は、一応完全に「上がりきった」ものとして表現されたものであるのに対し、先に挙げた「開始後終了前」の方は、「それまで上がっていなかった（静止していた）状況」から初めて「上がり始めた」という意味合いのものとして表現されたものであり、両者の意味は異なる。

次の「持続・状態を表す「している」」「持続・状態を表す「する」」がやや解りにくいと思う。「気がついてみたらもうスピードが上がっていた」という場合に、それまでの過程を捨象して全体をひっくめ、その結果を捉えて表現したものである。例えば、スピードは既に 140 キロまで上がっているが、まだ落ちてはいない、つまり、140 キロの段階である。この状況で、「列車が 140 キロまでスピードを上げている。」とも「列車が 140 キロまでスピードを上げる。」とも言うことができる。後者の非テイル形の方は気づきにくいかもしれないが、眼前描写的な文章や記録文ないし歴史年表的な文で、独語的、詩的、日記の記述的な雰囲気を持つけれども、文としては可能である。しかし、その後もうスピードが落ちてしまっただけからはどちらも言えない。従って、この表現が言える時はまだ元の状況へ回復していない。よって、この状況を表す局面を「終了後回復前」と呼ぶ。

念のために補足しておくと、この場合の「列車が 140 キロまでスピードを上げる。」という表現は、「上げる」という出来事そのもの——つまり低速から高速への変化——を表しているのか（開始後終了前）、結果的に 140 キロになっている状況を指しているのか（終了後回復前）、曖昧である。一つの用例はどちらかを表し、両方を表すと見做す必要はない。

最初に戻って、「開始前」の局面において、「持続を表す「する」」はもっと解りにくいと思う。また「変化直後の「した」」は果たして存在するのかわからず危うく思われるかもしれない。これらについては後述する。

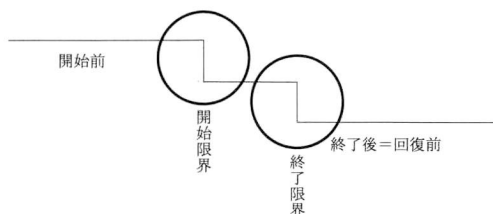
なお誤解のないように繰り返すと、ここに挙げた上げという動詞は、一つの動詞ではない。「列車がスピードを上げるよ。」と「列車がスピードを上げた。」「列車がぐんぐんスピードを上げている。」「列車がぐんぐんスピードを上げる。」、以下、全ての枠において、それぞれ別々の上げという動詞である。たまたま同じ形式の表現が同じ一連の事象のそれぞれの局面において使いうるので、並べただけである⁹。

以下、代表的な例として、先に挙げた「スピードを上げる」について見る。「開始前」の「変化直前を表す「する」」から「終了後回復前」の諸形式までの殆どを持つことが特徴である。但し、「開始後終了前」の「変化直前を表す「する」」の例は、「もう少し

で「十分に～～」のように、数量表現等を使って終了限界を設定してやらないと作りにくい。

この種のもは、開始限界を中心にした動詞と終了限界を中心とした動詞の、二つの動詞が混じっていると考えると解りやすい。

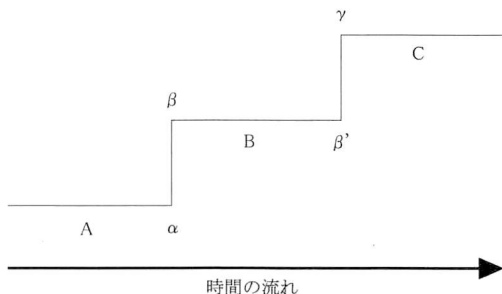
図示すると以下のようなになる¹⁰。



しかしこの二つの間にある過程を無視して、全体を一つの動詞として見ることができる。

⁹ 喩えて言うと、「受験する」「合格する」「入学する」「在学する」「卒業する」といった動詞は、それぞれ全く別の動詞であるが、同じ一連の事象のそれぞれの局面において使うことができる。これと同じである。

¹⁰ 大鹿 (1982) の次の図及び記述を参考にした。



A・B・Cは状態

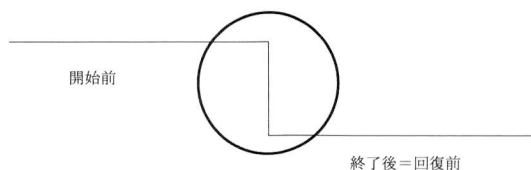
$\alpha-\beta$ 、 $\beta'-\gamma$ が変化であり、それぞれ $\alpha \cdot \beta'$ が開始、 $\beta \cdot \gamma$ が終結

$\beta-\beta'$ は過程であり、 β が開始、 γ が終結

たとえばBを「食べている」状態とするならば、Aは「まだ食べていない」状態であり、Cは「食べ終わった」後の状態である ($\beta-\beta'$ が「食べる」コトである)。またBを「咲いている」状態だとすれば α は「咲く」コトの開始であり、 β はその終結である ($\alpha-\beta$ が「咲く」コトである)。そしてAは「まだ咲いていない」状態である。

(大鹿 (1982)、100 頁下段)

この説明は、食べ (ル) 等の動詞の開始限界が一つの変化動詞に相当することを述べたようにも読めるが、はっきりしない。



その他にも、どの欄にあるかないかの組み合わせによって非常にバラエティーに富んだ類型に分けられる。今後多くの課題を残すこととせざるをえない。

4. 開始前の局面

前節までに、「開始後終了前」の局面において、タ形が「変化直後」を表し、非タ形や非テイル形が「持続・進行」を表し、非テイル形はまた「変化直前」をも表すことを見てきた。

但し、「開始前」の局面において「変化直後を表す「した」」や「持続を表す「する」」が存在するかどうかを保留しておいた。

「開始後終了前」と「終了後回復前」の局面において見られた関係は、「開始前」の局面においても平行して見られることが期待される。即ち、この局面においても「変化直後を表す「した」」や「持続を表す「する」」の表す用法が存在しても不思議はない。

しかし工藤(1995)の説では、動詞(及びタ・テイル)が「開始前」を表すことは全く期待できない。従って、「開始前」の局面を表す用法が存在するならば、本稿の枠組はそれがより自然に説明できる利点を持つことになる。

まず、可能性としての表現ならば、具体的な出来事はまだ起こっていないので¹¹、「開始前」の局面の「持続を表す「する」」に該当する。

この列車は(いつも)市街地を出るとスピードを上げる。

しかしこの種の「法則」の用法と「反復」の用法とは、鈴木(1979)の意味で「非アクチュアル」な表現のため、上の「開始」「終了」を基にした体系に入れると混乱する虞がある。そのため、上の体系では鈴木(1979)の意味での「アクチュアル」、即ち具体的な事象が「開始」「終了」といった時間に沿って展開するもののみを取り上げる。「反復」については別稿に譲る。

次に同じく「開始前」の局面の「変化直後を表す「した」」の説明である。ここに該当する用例は、どんな命題でも表れるというわけではない。例えば、本稿冒頭に挙げた次のようなものが該当する。

¹¹ 詳しくは別稿に譲る。

ドアを開けたが、開かなかった。

よし、買った！（まだ売買取引は成立していないが、買い手の側では決心したという場合）

これは、勝ったな。（将棋で、まだ相手は投了していないが、自分が大優勢であるという場合）

いずれも、常識的な見方としては“まだ開けて（開いて）いない”し、“まだ買っていない”し“ルール上まだ勝ったわけではない”。しかし、にも拘らずタ形で表現することができる場合がある。

これに対して、通常の「開けた」と上に引用した「開けた」とは、語の意味の低位分類として全く別物ではないかという見方ができるかもしれない。つまり、通常の「開けた」は“動作主の力によって対象が開いた”の意味であり、上の「開けた」は“対象が開くことを目的として、動作主がそのための力を加えた”の意味だとするのである。同様に、「買った」は“買うことを決心した”、「勝った」は“殆ど勝ちそうな状況が確定した”の意味だとするのである。これは、通常思い浮べられやすい「開けた」「買った」「勝った」の意味とは異なる意味を持つ動詞だということになる。しかし一方、「開始前」「開始後終了前」「終了後回復前」の枠組で言えば、「開始前」の局面に当たる。

局面	型 式	例 文
開始前	変化直後を表す「した」	ドアを開けたが、開かなかった。
	持続を表す「している」	さっきからずっとドアを開けているが、なかなか開かない。
	持続を表す「する」	さっきから何度もドアを開けるが、なかなか開かない。
	変化直前を表す「する」	もうすぐドアが開く。
開始後 終了前	変化直後を表す「した」	やっとドアが開いた。
	進行・持続を表す「している」	ゆっくりとドアを開けている。
	進行・持続を表す「する」	ゆっくりとドアを開ける。
	変化直前を表す「する」	もうすぐ完全にドアを開ける。
終了後 回復前	変化直後を表す「した」	すっかりドアを開けた。
	持続・状態を表す「している」	すっかりドアを開けている。
	持続・状態を表す「する」	すっかりドアを開ける。（結果）

つまり、このように全く別の意味を持つ動詞だとする分析こそが、本稿全体の主張の眼目なのである。言い換えれば、全く異なる意味を持つ動詞でも、「開始前」「開始後終了前」「終了後回復前」の枠の中では、一連の事象の一部分を担っているように見えるし、逆に言えば、一連の事象の中の種々の局面を同じ動詞が表すように見えても、実は別々の動詞であるということである。上に挙げた「変化直後を表す「した」」に限らず、「ぐんぐんスピードを上げている」の「上げ(る)」も「すっかりスピードを上げている」の「上げ(る)」も、全く別の意味を持つ動詞だと考えるのである。ここで「開始前」「開始後終了前」「終了後回復前」の局面に分けながら一連のものとして統合したのは、我々の直感に訴えるための便宜である。

また、「変化直後を表す「した」」があれば、「持続を表す「している」」もある。

ドアを開けたけど、なかなか開かない。

さっきからドアを開けてるんだけど、なかなか開かない。

これは、勝ったね。

これは、勝ってるね。(前出の「勝った」と同じ場合)

このことは、通常の変化を表す動詞によく見られる現象と同じものである。

境内に桜の花が咲いた。

境内に桜の花が咲いている。

「した」の形と「している」の形とは共に「完了」を表すため、「咲いた」と同じ場面で「咲いている」とも言える。このことと、「勝った」「勝っている」が同じ場面で言えることとは、全く同じ現象である。

このように、「開始前」の局面についても、他の局面と同じように取り扱うことができる。つまり工藤(1995)のような枠組は、制限がきつすぎるのである。言い換えれば、「ドアを開けたが」のような例だけが例外的な特別な意味として、通常の「開けた」と区別されるのではなく、そもそも通常の「開けた」が、色々ありうる意味のうちのただか一つを担っているにすぎないということである。

5. 先行研究との関連

同形の動詞が、アスペクチュアリティーの観点からは別々の動詞として見られることは、本稿が初めて主張したことではない。金田一(1950)は既にその立場を取っている。

金田一(1950)は動詞を「状態動詞」「継続動詞」「瞬間動詞」「第四種の動詞」の四つに分けている。ここで注意しなければならないことは、一つの動詞で複数に亘っているものが多いということである。

先ず、第二の継続動詞と第三の瞬間動詞とにまたがるものは殊に多く、例えば所謂場所の移動を表わす動詞は総てこの二類の動詞を兼ねている。「来る」は向うから此方へ移動する途中の動作全体を意味することがあり、この時は継続動詞である。然しまた此方へ到着した瞬間を意味することもあり、この時は瞬間動詞である。(後略) (金田一 (1950)、11 頁)

次に高橋 (1985) の中で、動詞分類に関係したところを見てみる。高橋 (1985) では、「動作動詞」と「変化動詞」という大きな分類枠になっているが、この分類枠を越境する場合についても次のように指摘がある。

まず「あかんぼうがはじめてあるきだしたのを」見た場合に「あるいた、あるいた！」というようなものを「始発の局面」として、「動作動詞の変化動詞化というかんがえもなりたつかもしいない。」(45 頁) としている。

次に変化動詞について「結果の局面」即ち「はじめの三日間はベテランがくわった」のような例を「その結果の局面を動作の局面とする動作動詞のようになりかけているのだろう。」(47 頁) とし、「おどろいてとびあがった」(48 頁) や「赤ちゃんが三十分ねむった。」(49 頁) のような例はもっと積極的に「動作動詞化」としている。「全東京市のすべての新聞が、こうした同じような記事を掲載した。」(49 頁) のような「対象変化動詞」のものは、もともと「動作動詞」でもあるのだが、掲載する行為それ自体だけではなく、掲載された結果についても意味の中に含まれている可能性があるというものである。

このように高橋 (1985) においても「動作動詞」「変化動詞」という枠が流動的であることが認められている。

堀口 (1987) でも、「アスペクチュアリティーの多義性の問題」について既に指摘がある。

- (I) “動作動詞”¹²の表す動作過程は、始発・動作（運動）・終了の三つの局面からなるが、これの“完成相”は、そのすべての局面を含みこんで、“まるごと”のすがたで“動作”をさしだすのが基本である。しかし、時には、その始発の局面のみをとりだして、その局面を“まるごと”のすがたでさしだす。“継続相”は、もっぱらその前者の局面の中にあるすがたをさしだす。
- (II) “変化動詞”¹³の表す変化過程は、変化（運動）・結果（静止）の二つの局面からなるが、これの“完成相”は、そのすべての局面を含みこんで“まるごと”のすがたで“変化”をさしだすことはなくて、変化（運動）の局面のみをとりだして、その局面の始発から終了までを“まるごき”のすがたでさしだす。“継続相”は、もっぱらその後者の局面の中にあるすがたをさしだす。

(堀口 (1987)、7 頁)

¹² おおむね工藤の「(A・1) 主体動作・客体変化動詞」と「(A・3) 主体動作動詞」に相当。

¹³ おおむね工藤の「(A・1) 主体動作・客体変化動詞」と「(A・2) 主体変化動詞」に相当。

ここでは、「完成相」(非テイル形)と「継続相」(テイル形)のアスペクチュアリティーが、必ずしも「一つの動詞」の中で対応したものではないことが指摘されている。つまり、「動作動詞」の「完成相」には、工藤(1995)の用語で言えば「ひとまとまり性」と「開始限界達成性」とがあるが、「継続相」の「動作継続性」は前者と対応するものではあっても後者と対応するものではなく、また、「変化動詞」の「完成相」には「変化過程のひとまとまり性」と「結果状態のひとまとまり性」とがあるが、「継続相」の「変化結果継続性」は後者と対応するものではあっても、前者と対応するものではないというのである。

そこで堀口(1987)は、「動作動詞」を<継続運動動詞(略称:継続動詞)>と<始動動詞>とに分け、「変化動詞」を狭義の<変化動詞>と<持続事態動詞(略称:持続動詞)>とに分ける¹⁴。

ところでCOMRIE(1976)はアスペクトを大きく二つに分けている。「パーフェクティブ」と「インパーフェクティブ」である。先に本稿は、動詞は、「変化自体を表したり、変化の後の状況を表したりする」と述べた。このことと、COMRIE(1976)との関連を述べると、「変化自体」が「パーフェクティブ」であり、「変化の後の状況」が「インパーフェクティブ」にほかならない。「変化自体」を表す動詞は、タヤテイルを下接し¹⁵、「変化の後の状況」を表す動詞は、動詞単独で用いることができる。つまり、日本語では、動詞の連用形(タヤタに前接する形)と連体形が「パーフェクティブ」と「インパーフェクティブ」の違いと対応している¹⁶。

6. さいごに

以上述べてきたことは、アスペクチュアリティーを考察する場合には、アスペクチュアリティーに即した見方をすると、動詞の意味がより単純な形で記述できるということである。

勿論、アスペクチュアリティーとボイス等、その他の文法範疇との関係を考察することも重要な研究である。しかし、当のアスペクチュアリティーを論じる際に、同語形で異なるアスペクチュアリティーを表す場合についての考察が不十分なために、夾雑物の混じった試料を扱っていた感が否めない。本稿が、混合物を単体に分離することにより、より有意義なアスペクチュアリティーの研究を招来することになれば幸である。

¹⁴ 堀口(1999)では、堀口(1987)と用語の範囲が異なっている。本稿に纏めた堀口(1987)の方が記述が明確である。

なお詳しくは述べないが、非テイル形とテイル形との対応のさせ方が本稿と堀口(1987)とは異なっている。

¹⁵ 未来を表す場合については、詳しくは別稿に譲るが、現在における意志や推測のある状況であって、出来事自体を表すとは捉えない。

¹⁶ 中止法については、別に考えるべきことがあるので、一概に「パーフェクティブ」と言えるかどうかは保留する。

参考文献

- 大鹿薫久 (1982) 「未完了・完了・未来・過去—終止法の述語における—」『山辺道』
26
- 金田一春彦 (1950) 「国語動詞の一分類」『言語研究』15 (『日本語動詞のアスペクト』(金田一春彦編、むぎ書房、1976) による)
- 工藤真由美 (1982 a) 「シテイル形式の意味記述」『武蔵大学人文学会雑誌』13-4
——— (1982 b) 「シテイル形式の意味のあり方」『日本語学』1-2
——— (1983) 「宇和島方言のアスペクト(その一)」『国文学解釈と鑑賞』48-6
——— (1987) 「現代日本語のアスペクトについて」『教育国語』91
——— (1995) 『アスペクト・テンス体系とテキスト—現代日本語の時間の表現—』(ひつじ書房)
- 桜井光昭 (1978) 「平安時代語の時の表現」『国語学』112
- 鈴木重幸 (1979) 「現代日本語の動詞のテンス—終止的な述語につかわれた完成相の
叙述法断定のばあい—」『言語の研究』(むぎ書房)
- 高橋太郎 (1985) 『現代日本語動詞のアスペクトとテンス』(国立国語研究所報告
82 (秀英出版))
- 土岐留美江 (1999) 「現代韻文資料における日本語動詞基本形のテンス」『国語国
文』68-6
- 堀口和吉 (1987) 「動詞の表す〈継続〉〈持続〉—「～ながら～」をめぐって—」『天
理大学学報 語学・文学・人文・社会・自然編』155
——— (1999) 「～り・たり」「～けり」の表現」『山辺道』43
- 宮島達夫 (1985) 「「ドアをあけたが、あかなかった」—動詞の意味における〈結果性〉
—」『計量国語学』14-8
- 森山卓郎 (1983) 「動詞のアスペクチュアルな素性について」『待兼山論叢文学篇』17
——— (1986) 「日本語アスペクトの時定項分析」『論集日本語研究 (一) 現代編』
(宮地裕編、明治書院)
- (1988) 『日本語動詞述語文の研究』(明治書院)
- COMRIE, Bernard (1976) 『Aspect』(Cambridge University Press) (山田小枝
訳『アスペクト』(むぎ書房、1988) を適宜参照)
- (ふくざわ まさき・北大大学院博士課程)